

2022年1月8日（土）上演⑥

茨城県立水戸第一高等学校

「なないろひめ」

第57回関東高等学校演劇研究大会（東京会場）

生徒講評委員会 講評文

生徒講評委員会 担当委員

大石 未来（東京都工学院大学附属高等学校1年）

自由や平等、多様性など昨今の社会問題を風刺するような強いメッセージ性を感じる劇であった。

文化祭の劇を通して様々なテーマが織り込まれていて、多くの事を考えさせられた。とりわけ相手を認めるということに関して、その重要性を認識させられた。

劇中劇や登場人物の心理描写などで観客に訴えかけるのが非常に魅力的で、講評委員はそのとりことなった。ソーセージとねずみと小鳥の話はとても印象的で、2人の葛藤を描いた上で白雪姫もなないろひめもどちらも両立させるのが素晴らしかった。

委員長が劇を見て傷つく人がいるかもしれない、と口にするシーンで、彼女がただいじわるを言っているわけでは無い事が分かると同時に、生きづらくないようにする事が結果的に誰かを生きづらくしてしまっているという事が鋭く表現されている。これを見て思わず「自身の言動を振り返りたくなった」という声が講評委員からあがった。

役者について、個々のスキルが光っていたという意見が多く出た。演技はもちろんのこと、ヴァイオリンやギター、歌にダンスなどレベルの高いパフォーマンスを披露してまるでミュージカルを見ているようだったし、そこから多様性を感じさせられた。

また、舞台上にある舞台の使い方がとても効果的で、さらに中央に置いてある鏡によって空間がぐっと広く感じられた。 Horizont だけでシルエットを見せるのがとても良く、照明の色も相まって主人公の憧憬のようなものが伝わってきた。

様々な面から見られて色んな解釈ができるこの劇だが、高校生がやることに意味がある、という意見も出た。高校に入り個人個人の色が出てくる中で同調圧力もかかるこの時代に、個性を出してもいいというのが力になった。また、実際に劇に対して外国人の演技に批評を受けたことがある、という委員もおり、一層この劇が身近に感じられた。

こちらに訴えかける、考えさせられるシーンだけでなく、ユーモア溢れるシーンがあり、楽しみながら見る事ができた。特にラストのお姫様抱っこをするシーンは思わず悲鳴を漏らしてしまった。

自由や平等など、どこか遠く感じていた出来事を改めて考えさせられ、登場人物達の等身大の思いが心に響いた、まさになないろに輝くような劇であった。

茨城県立水戸第一高校演劇部の皆さん、魅力的な劇をありがとうございました。

